

## [003\_1980]第三回中央図書館貴重文物展観目録：中国近世思想関係貴重漢籍

九州大学附属図書館中央図書館

荒木，見悟  
九州大学文学部：教授

<https://doi.org/10.15017/1485001>

---

出版情報：大学広報. 370, pp.1-10, 1980-03-05. The Committee of Public Relations Kyushu University

バージョン：

権利関係：



# 大学広報

№370

昭和55年3月5日発行

(編集)

九州大学広報委員会

## 第三回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

### は し が き

中央図書館では、今年度から特定のテーマを選んで、本館所蔵の貴重な学術資料の展示を続けて来ましたが、このたびその第三回として「中国近世思想関係貴重漢籍」を展観することとしました。

本学における中国哲学史講座の初代教授であられた楠本正継先生(1963歿)は、中国近世思想研究に斬新卓抜な業績を残されましたが、御在任中、その方面の基礎資料収集に異常な熱情をかたむけられ、その広範にしてかつ体系的な蓄積は、本学所蔵漢籍の一特色をなしております。更に、先生の御斡旋により、その大叔父にあられる漢学者楠本碩水遺愛の蔵書の譲渡を受け、碩水文庫として所蔵するに至ったことは、斯学の研究発展に重要な意味をもつこととなりました。

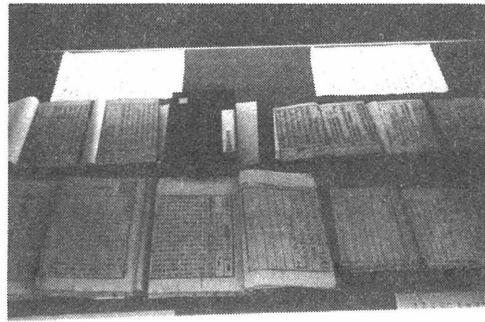
今回の展示は、碩水文庫をふくむ貴重漢籍の一部ではありますが、解説は必ずしも書誌学的方法にかたよらず、むしろそれぞれの書籍の成立経過を通して、中国近世思想の動向の一端がくみ取れるよう配慮しました。教職員や学生諸君が多数来観されるよう希望いたします。

なお、今回の展示に際しては、展示漢籍や版木の配列・解説等につき文学部荒木見悟教授にひとかたならぬ御尽力と御指導を頂きました。ここに衷心より御礼申し上げます。

記

場 所 : 中央図書館メインロビー

期 間 : 3月3日(月)から4月19日(土)まで



展 観 資 料 の 解 説

楠本碩水略伝

楠本碩水(1833 - 1916)、名は孚嘉、あぎなは吉甫、謙三郎と称し、碩水または天逸と号した。天保三年正月二十六日、肥前国彼杵郡針尾島江下(現佐世保市針尾中町)に、養斎の三男として生まれた。長兄は端山(名は籙蔵、のち後覚と改む。あぎなは伯晁、明治十六年歿)である。若くして佐々氏の養子となるが、のち本姓に復し、平戸藩に仕え、藩学教授となった。明治元年、藩議によって貢士となり、五月京都に上る。朝命により会計官租税司判事となり、漢学講官に転じ、また大学小博士に叙せられた。三年秋、大学が廃止となるとともに平戸に帰り、針尾山中に蟄居するが、その学徳をしたい、来り学ぶ者が多かった。よって兄端山と鳳鳴書院を設立し、いくたの人材を育成した。

碩水は研学の念が厚く、広瀬淡窓・草場珮川・木下韓村等に就き、また江戸に遊んで佐藤一斎の講場に列したこともあるが、最も大きな影響を受けたのは、肥後長洲の月田蒙斎であり、その他金子霜山・春日潜庵・大橋訥庵・吉村秋陽・池田草庵・尼崎修斎・小笠原敬斎の諸儒と親交を重ねた。生涯一貫して山崎闇斎流の朱子学を信奉し、強い名分意識をいっていたが、人間的抱擁力に富み、隠棲後も、遠近各地より道を問うものが絶えなかった。大正五年十二月二十三日歿す。

その苦心収集した龍大な漢籍は、昭和八年、九州大学に移譲され、碩水文庫として保管さ

れている。碩水の著書には、碩水遺書十二巻、碩水詩草二巻、碩水餘稿三巻附録二巻、過庭餘聞一巻、碩水日記一巻があり、編書には、聖学要領一巻、朱王合編四巻附録一巻、崎門学脈系譜四巻附録二巻、日本道学淵源録四巻統録五巻増補二巻がある。必ずしも時流に投じないこれらの書の出版に心血をそそいだのは、門人岡直養（1864 - 1948）であって、いま師弟の墳墓は、針尾の故山に、十歩をへだてて永遠の語らいを続けている。

### 碩 水 遺 書

大正七年（1918）刊。十二巻五冊。本書は、楠本碩水の詩文を集めた彼の主著であり、詩二百七十首、文一百二篇、語録七百九十一条をおさめる。巻頭にかかげられた碩水の自序は、明治八年の撰となっているが、これはその内容より推して、その当時編集された詩集のためのものらしく、本書には、碩水最晩年、即ち大正期に入ってまでの詩文をも網羅している。版心のあちこちに「守待室蔵板」と刻されているが、その守待室とは、碩水八十歳の時、邸内に構えた蔵書室の名である。元来、碩水は、「他日、国史を修する者、幸いに姓名をその間に列するあらば、則ち隠逸伝中の人たらん」というがごとく、世俗的虚名を追うことを、極度に忌諱した人であった。従ってその著述の刊行を容易に肯わず、大正五年夏、門人岡直養（名は次郎）の熱心な説得により、漸く許諾したのであるが、この年十二月、碩水は他界するため、ついに存命中には果されなかった。しかし恩師の学徳を顕彰しようとする直養の決意は固く、当時、中国漢口において新聞社を経営していた実弟安節（名は幸七郎）と緊密な連絡をとり、大正七年、漢口において発刊したのである。題簽は、清朝の遺臣鄭孝胥の手に成り、活字はすべて宋本を模するほどの熱情をこめたのであった。幕末生き残りの儒者として、急激に近代化の歩みを進める世相の前途に深憂を抱きつつ、針尾山中に蟄居した一朱子学者のときすまされた心境が、全篇を貫いている。なお本書の板木は、一括本学附属図書館に保管されているが、ここにその一部を展示することとした。

### 伝習録欄外書

三巻三冊。佐藤一斎著、楠本碩水写。伝習録は、陽明学の基本典籍として、わが国でも広く読まれて来たが、徳川時代に、この書に註釈をほどこしたのは、三輪執斎（1667-1744）と佐藤一斎（1772 - 1859）の両家である。執斎本は、正徳二年（1712）に翻刻されるが、（のち大正初年には漢文大系におさまらる）一斎はそのあとを受けて、天保元年（1830）、

独自の観点から、本文欄外に詳細な頭註を加えたのであった。異本の校合、先学の論弁の引用、斬新な評語の点描等、一斎註はさながら一篇の陽明学論を展開している観がある。ただこの書は写本として伝承されたにとどまり、明治三十年(1897)、ようやく東京松山堂より出版された。しかしこれはきわめて誤植・脱字が多く、しばしば判読に困難をおぼえる。碩水は早くから一斎註の定本を作るべく努力し、みずからその全文を丹念に筆写し保存していた。従って今日、伝習録欄外書を正確に読み通すためには、ぜひとも碩水自筆本を参照する必要がある、その意味でこの写本は珍重さるべきものである。

### 楊龜山先生集

万曆十九年(1591)刊。四十二卷十冊。楊龜山(1053-1135)、名は時、あざなは中立、龜山は号である。南劍州将楽(福建)の人。熙寧九年(1076)進士に合格するが、官途に意なく、洛陽の程明道・程伊川兄弟について学をきわめ、程門の俊傑と称され、南方に赴任せんとするや、程子は、「我が道南せり」とその前途に望みを嘱したという。その講学の範囲は、江蘇・浙江を主とするが、その三伝の弟子に朱子(1130-1200)が出、儒学を大成し、学統を定めたために、龜山の中国思想史上の地位はきわめて高くなる。特に、明の万曆年間に新朱子学を標榜した東林学派が、無錫(江蘇)の龜山書院址に東林書院を興し、多くの人材を養成したために、龜山の名は一層世の注目するところとなった。

龜山集は、三十五巻本として編纂された旧版が早く散逸し、明の弘治十八年(1505)、心性の鍊磨に益あるもののみを集めた十六巻本が刊行され、続いて正徳十二年(1517)三十六巻本も出現するが、万曆十九年に至り、漸く最も完備した四十二巻本が、将楽知県林熙春の手により発刊されるのである。以後、清朝の順治本・康熙本等はすべてこれに依拠している。

### 近思録集解

正徳十四年(1519)、朝鮮鳳城精舎刊。十四巻四冊。近思録は淳熙二年(1175)、朱子が、その友人呂東萊とともに、その尊敬する北宋の四人の学者、すなわち周濂溪・程明道・程伊川・張横渠の遺著から、初学者の入門に切要な言葉六百二十二条を選びとり、十四門に分類しまとめたものである。従って、この中には、朱子その人の語はおさまられていないのであるが、恰好の道学入門書として歓迎され、朱子自身も、「四書は六経の楷梯、近思録は四書の楷梯」とのべるほど推賞したと言われる。近思録が広く世に行われるにつれ、その

註釈書もつぎつぎとあらわれるが、特に著名なのは、朱子再伝の門人たる葉采（あざなは仲圭、郡武の人）の近思録集解である。彼は淳祐元年（1241）進士に及第し、累遷して翰林侍講に至る。集解は淳祐八年に完成し、同十二年、理宗帝にたてまつられているから、この時すでに刊刻されていたのかも分らない。明代には、正統元年（1436）本、無刊記本等があるが、ここに展示したものは、書品典雅な朝鮮刊本である。

### 慈湖先生遺書

嘉靖四年（1525）序刊。十四卷十冊。南宋の学者楊慈湖（1141 - 1226）の詩文集である。慈湖、名は簡、あざなは敬仲、慈湖はその号である。慈溪（浙江）の人。乾道五年（1169）、進士に及第し、富陽主簿に任じていた時、陸象山（1139 - 1192）の激発を受けてその門に入る。ただ陸象山の思想が豪宕な面を保有するに對し、慈湖は、山中の深潭を思わせるような静謐さを持ち、陸学派の中でも別格の扱いを受けるようになった。しかしその概念的分別を極度に拒否する清澄な想念は、朱子学が行きつまった明代中期以降、人心をねり直す基礎体験を示すものとして注目され、「儒門の学、慈湖もつとも光明となす」という評価を下す著名な文人（袁中道）さえあらわれるに至った。つまり恩師陸象山が、王陽明の力により見事に復活したのとはちがった意味において、慈湖は慈湖なりの影響力をもち得たのである。

慈湖遺書は、明代において、十八巻本と二十巻本の二種が刊行されたようであるが、九大所蔵本はその前者に属する。惜しむらくは巻一より巻四までを欠いているが、その書品は良好である。

### 性理大全

嘉靖三十二年（1553）刊。七十巻二十冊。胡広等奉勅撰。明代における科挙試の基準テキストに、朱子学系統の註釈書を用いる慣例は、太祖の洪武初年から始まるのであるが、成祖の永樂十三年（1415）、三大全（五経大全・四書大全・性理大全）を公布することにより、朱子学の国教化は決定的となる。三大全のできばえについては、胡広をはじめ、その編集にたずさわった学者の見識が低かったため、後世批判の声が絶えず、朱子学者の中にも、これが原朱子学の生気をそぐ起因となったとの嘆声をもらすものがあるほどであるが、ともかくこれが明一代の国定教科書として果たした役割は、相応に評価しなければなるまい。従って三大全は、明代においてはたびたび刊行されたはずであるが現存する版本は意外に少ない。こ

ここに展示したのは性理大全であるが、これは宋代の朱子学系の学者百二十家の説を集め、「太極図説」以下、主要な道学書を収めるとともに、卷二十六以下は、諸儒の語を採集して、理気・鬼神・性理・道統・諸儒・学・諸子・歴代・君道・治道・詩・文の十二門に分類し、道学修得のための基本的要項を示している。

因みに性理大全は、わが国でも、承応二年（1653）に刊行されている。

### 遜 志 齋 集

正徳十五年（1520）刊。二十四卷序目一卷附録一卷十五冊。本書は、明初の朱子学者方孝孺（1537 - 1402）の詩文集であって、遜志はその号である。孝孺は、明の二代皇帝恵帝の侍講となるが、建文四年（1402）、靖難の役が勃発、恵帝は敗れて、その叔父成祖（永楽帝）が即位する。成祖は、即位の詔勅を孝孺に起草させようとするが、恵帝に殉ぜんとする孝孺は、頑としてこれに応ぜず、ついに磔刑に処せられ、連坐するもの数百人に及び、孝孺の著述は長く発禁処分となる。その後、仁宗が即位するに及び、漸くその禁がゆるみ、孝孺の詩文も徐々に世にあらわれるに至った。遜志齋集が始めて編集されたのは、天順七年（1463）のことであるが、この時に収集された詩文は、二百六十七篇にとどまったという。その後十七年を経て、大幅に資料を追補し、七百五十余篇を収めて、成化十六年（1480）に新刊遜志齋集（三十卷、拾遺十卷、附録一卷）が寧海で刊行された。（静嘉堂文庫所蔵）ついで正徳十五年（1520）顧璘（王陽明の友人）らの発議により、成化本の偽謬を刪定し、分巻も改め、姑蘇において刊刻された。この正徳本に模して、以後、嘉靖版、万曆版が續刻され、特に嘉靖版は四部叢刊に影印しておきめられ、今日もっとも広く普及している。ここに展示した正徳版は、言わば遜志齋集の祖型を示すものである。

なお参考までに万曆四十年刊本を、あわせ展示した。

### 大 慧 禪 師 書 問

万曆四十五年（1617）刊。一卷一冊。南宋初頭の禅僧大慧宗杲（1089 - 1163）の書簡を集めたものである。禅宗は五代から北宋にかけて、大いに発展し、五家七宗と分派するほどの盛況を呈するが、中でも圓悟克勤（1063 - 1135、碧巖録の編者）から大慧宗杲へと伝えられた楊岐派が最も隆盛をきわめ、その法系は、元明清を通じて、教界の第一線をなうこととなる。その主因は、大慧禅が士大夫階層と密着し、その形骸化した知識技能を、公案

の威力により根柢から破摧し、新運打開への転換契機を与えたところにあると考えられるが、そうした信念を懇切に示したのが、本書におさめられたかずかずの書簡である。大慧には、他に語録・法語等も存するが、この書簡はとりわけ広範に普及し、中国・朝鮮・日本三国において、たびたび翻刻されたあとがうかがわれる。ここに展示した刊本は、通行本よりもやや分量が少く、校訂者蔡善繼の伝記も詳かでない。しかしこうした特殊な様式をもつ板本が出現するほどに大慧禅流行の経緯を示す貴重な資料というべきであろう。

### 道 一 編

弘治刊。六卷二冊。程敏政（1445 - ?）の編。敏政、あざなは克勤、号は篁墩。休寧（安徽）の人。成化二年（1466）進士にあげられ、歴官して礼部右侍郎に至り、内閣の誥勅起草にあずかる。早くから文名をはせ、篁墩文集（九十三卷、拾遺一卷、正徳二年跋刊。九大蔵）が現存する。

洪武・永楽以来、科挙の制は一応朱子学に準拠していたとはいえ、人心は必ずしも定型的な朱子学の枠内に満足し得ず、あるいは文辞放談に流れ、あるいは異学（陸象山学・仏教学）に接触し、思想界の底流にはすでにただならぬ動きが兆しつつあった。こうした風潮を背景として、敏政の道一編は編刊されるのである。そのねらいは、朱子学与陸象山学とは、「早異晩同」（早年は異なるも晩年は一致す）であって、その終局においては何ら矛盾するものではないことを立証するにあり、朱陸二子の文集はもとより、その後学の朱陸結合に関する発言を集め、その論拠としている。つまり、「宇宙の間、道は一なるのみ。道の大原は、天に出づ。それ人に在りては則ち性となりて、心に具わる。心豈に二あらんや」（道一編目録後記）という語に、彼の編集目的は集約されているのである。有名な王陽明の朱子晩年定論も、この書より大きな示唆を受ける。

### 金華正学編

万曆七年（1579）刊。十卷二冊。趙鶴編。金華（浙江）は、宋代以来、文献集積の地として知られ、いくた著名な学者が輩出した。この書の編者趙鶴は、あざなは叔鳴、号は具区、江都（江蘇）の人であるが、弘治九年（1496）進士に及第し、戸部主事を経て、金華の知事となる。そうした機縁で、本書の編纂を思いついたのである。

本書は、金華出身の五名の学者、すなわち呂東萊・何北山・王魯齋・金仁山・許白雲の伝

記と学説を紹介したものであって、前五巻は伝記にかかわる資料を、後五巻は道源にかかわる文を集めており、その手法は朱子の伊洛淵源録にならったのである。編者のいう正学とは、まさに朱子学のことである。明初に文名をはせた宋濂が、この地の出身者であるにもかかわらず収載されていないのは、朱子学路線よりずれていると判断したからであろう。本書は、自序によれば、正徳六年（1511）、完成したようであるが、万暦七年、金華において重修刊行された。本書が世に出た当時、陽明学の流行に圧倒されて、朱子学は斜陽化しており、それだけに伝本も少く、今日では希覯視すべきものと思われる。

### 高子遺書

崇禎四年（1631）刊。十二巻附録一卷八冊。本書は万暦年間に活躍した学者高忠憲（1562 - 1626）の詩文集である。忠憲、名は攀龍、あざなは存之、号は景逸、卒して忠憲と諡された。無錫（江蘇）の人。万暦十七年（1589）進士に及第、当路者と合わず、家居すること三十年。その間、万暦三十二年（1604）、盟友顧憲成らとともに、無錫に東林書院を創立し、新朱子学の旗幟をかかげ、後進の育成にあたりとともに、時政の得失を議し、東林党は一種の政治集団の観を呈し、天下の耳目を聳動するに至る。天啓初年（1621）、復官して左都御史にまで昇るが、宦官魏忠賢に諱まれて帰郷する。いくばくもなく東林書院は毀たれ、逮捕の吏至ると聞き、水に投じて死す。（天啓六年）

高子遺書は、忠憲歿後五年、その晩年の門人陳龍正の手により刊刻され、憲成の顧端文公遺書（碩水文庫蔵）とともに、東林学派の思想をうかがう基本資料となっている。本書は、康熙年間及び光緒年間にも重刊され、民国十一年には、無錫県図書館より刊刻されているが、嵩禎本は、その祖型となったものである。

### 羅近溪全集

万暦刊。三十巻二十四冊。本書は、陽明学左派の流れをくむ羅近溪（1515 - 1588）の語録・庭訓・詩文を集めたものである。近溪、名は汝芳、あざなは惟徳、近溪はその号。南城（江西）の人。万暦年間における破格の思想家の一人である。王陽明の良知説は、国教としての權威をふるった朱子学的倫理意識の閉塞状況をあばき、根源的自主性の回復による新しい人間像・社会観の樹立をめざす運動としての形態を濃厚にして来るが、その左派の一部は、その運動の基盤を農村共同体に求め、従来士人層中心にくみ立てられて来た儒教倫理を、庶

民層にまで拡大深化しようとする方向をたどるに至った。そうした思想運動の先頭に立ったのが、羅近溪である。彼は、陽明の良知にかえて、「赤子の心」に帰るべきを強調するが、それは天与のままの脈々たる人間的連帯感への復帰を、人びとに呼びかけるものであった。その反響は大きく、彼の行くところ、講場には士庶入りみだれて殺到したという。近溪集の一部（たとえば明道録と名づけられるもの）は、徳川時代に日本に伝わり、伊藤仁斎のごときも、早年、これを熟読している。近溪の語録は、その存命中から、いく度か編集されたようであるが、士庶の区分にとらわれぬその型破りな思考法は、結局、持続的に発展することができず、そのまとまった文集は、ごくわずかしが残存していない。

### 焚 書

万曆刊。六巻四冊。李卓吾（1527 - 1602）の著。卓吾、名は贄、卓吾はその号、別に宏甫と号す。泉州府晋江县（福建）の人。二十六歳、福建の郷試に合格し、河南輝県教諭、雲南姚安府知府等を歴任するが、五十四歳の時、官を辞して湖北黄安にこもり、著述にふける。五十九歳、麻城山中の仏寺芝仏院に移居、僧侶と生活を共にし、三年後、ついに出家剃髪し、士大夫層への反逆の姿勢を示す。その落髪が、穩健な仏道修行者たらんことを志したのではなく、思想言論の自由を確保し、道学の仮面と官界の偽善をあばくための強行手段であったことは、やがて明らかとなる。麻城において刊行された焚書は、經書の權威から離脱、無能な吏僚への罵倒、真率な人間性への謳歌、いわれなき偶像崇拜への反撓等が、激越な口調で展開されているのである。これを機に、当路者の卓吾への圧迫は急速に進行し、万曆二十八年（七十四歳）、芝仏院が焼打ちに会い、かろうじて商城黄蘗山（河南）に逃れ、北上して通州（河北）に入るが、万曆三十年（七十六歳）、逮捕投獄され、ついに獄中で自殺する。卓吾はまさに万曆年間最大の異端思想家であり、その思想的結晶ともいうべきものが、焚書及び続焚書である。ただその著述は早く発禁処分にあつたため、その原刻本の存佚はさだかでない。ここに展示した焚書は、卓吾晩年の資料をふくむから、初刻本（万曆十八年刊本）とは認めがたいが、その様式・書品よりして万曆末年の刊本と思われる。

### 李 氏 説 書

明刊本。九巻四冊。本書は、初丁に「泉州卓吾李載贄編輯」「莆田龍江林兆恩閱著」と双行に記されているように、李卓吾の編集したものに、林兆恩が校閲の筆を加えたものかと推

定される。「説書」とは、巻頭にかかげられた如真道人の序文に、「夫れ書を説くとは、何の書ぞや。孔會思孟の書を説くなり」とのべられているように、論語・大学・中庸・孟子の四書について、その内容を發揮したものである。その解釈を微細に検討してみると、卓吾と兆恩の論説が入りまじっていることは、疑うべくもない。卓吾が友人焦竑に与えた書簡によれば、彼自身に李氏説書と題する著書が用意されていたことは明らかであるが、今本は恐らくそれと兆恩の思想とを合糅することによって成立したのであろう。それが『李氏説書』の書名をそのまま残したのは、卓吾の盛名とともに、序文の筆者如真道人のはからいによるものと推定される。如真道人とは、当時金陵（南京）で活躍した李登（あざなは土龍）のことであり、卓吾と多年にわたり交渉をもった人物だからである。卓吾と兆恩とは、必ずしもその思想傾向が完全に一致するわけではないが、明末における人間解放運動の波にのった点では共通性があり、それがこうした異色ある四書註釈書の編纂を可能にしたのであろう。

本書は近年、中国において一・二部発見されたようであるが、わが国では、九大蔵本が唯一のものではないかと思われる。